

週刊センターニュース No.85



第85号(2005年11月15日)毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

共同学習会のご案内

第95回 日時: 11月18日(金) 10:30~12:00

場所: 金沢大学角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

発表者: 青野 透、堀井祐介(大学教育開発・支援センター)

テーマ: 「課外活動団体顧問教員制度について」

第96回 日時: 11月21日(月) 16:20~17:50

場所: 金沢大学角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

発表者: 池上良子(工学部)、太田建彦(環境保全センター)、早川和一(薬学部、21世紀COE)

テーマ: 「大学・社会生活論の授業開発(第1回) 環境教育について」

第97回 日時: 11月22日(火) 16:20~17:50

場所: 金沢大学角間キャンパス総合教育棟南棟2階大会議室

発表者: 林 透(北陸先端科学技術大学院大学総務課)

テーマ: 「これからの大学職員のための提言」

双方向遠隔授業システムを利用した授業・研究会について

北陸地区国立大学連合の双方向遠隔授業システムは、本年3月に北陸地区の各国立大学に導入され、今年度は試行を重ね、平成18年度から本格的に稼働予定である。同一大学の複数キャンパス間における双方向遠隔授業システムはすでに他の国立大学においても存在するが、複数大学間は北陸地区のこれが最初の例となる。

当センターの教育支援システム研究部門では、堀井助教授が、システム導入・運用にあたって中心的役割を果たしてきた。私はすでに本年3月、このシステムを用いてどのような授業を展開することが可能か、について「双方向遠隔授業システムの特性を活かした授業企画」と題して第3回北陸地区国立3大学教養教育研究会で発表した。その後、この9月以降ほとんど毎週のようにこのシステムを使った授業や共同学習会を担当してきた。その経験を踏まえ、双方向遠隔授業システムの現状と問題点を以下に報告したい。

双方向遠隔授業システムとは、具体的には、例えば角間キャンパスの総合教育棟D10講義室での授業を、鶴間キャンパス、富山大学五福キャンパス、そして福井大学松岡キャンパスにライブで送信する。ネットワークには、このほか、富山大学高岡、同杉谷、福井大学文京、そして北陸先端科学技術大学院大学の各キャンパスが含まれている(特殊な装置が必要なため、通常の講義室ではこのシステムの導入は不可能であり、現在角間キャンパスでは、総合教育棟の2教室、鶴間キャンパスでは1教室に導入されているだけである)。

同時に3会場に向けて送信できる。受信側の会場正面のスクリーンには、送信側の黒板を背にした講師の姿が映っている。送信側の教壇反対側、つまり講義室内の学生の背後のスクリーンには受信側会場の受講生を大写しにした映像があり(受信が複数会場の場合は、時間をおいて自動的に切り替わる)、教員をそれを見ながら授業をすることになる。受信側の学生が講師に質問をするさいは、卓上のマイクのスイッチを入れれば可能であり、その場合には、送信側には、発言をする学生のアップの映像が送られ、講義室内のスクリーンに映し出される。

つまり、複数のキャンパス、複数の大学の学生たちに、同一内容の授業を受けてもらうことができるのである。もちろん、受信側会場の学生たちの前には、黒板を背にした教師の映像しかないが、ビデオ授業とは異なり、ライブであるので、質疑応答が可能である。教員は、受信側講義室の学生を目の前にいる学生と同様にあてて、回答させることもできる。音声のタイムラグはほとんど感じるこ

がない程度である。

授業環境としては、プロジェクター、ビデオ、OHC等、通常の機器を使用できる（電子黒板もある）。例えば、送信側でプロジェクター画面を、黒板右手のスクリーン（ちなみに、D10講義室には、黒板の両側に2面、受講生後ろの壁に2面、計4面のスクリーンがある）に映し出すと、その映像は受信側講義室の黒板右手のスクリーンにも映し出されることになる。このような標準設定のままであれば、教員は講義室では双方向だからといってもなんら機器に触ることはしないでもいい。通常の授業のように講義室に来て、スクリーン上に、つまり講義室の後ろにもう一つ講義室がくっついているような感覚で授業をするだけでいいのである。

さて、このシステムを私は、以下のように利用してきた。まず、当センター主催の共同学習会は、9月22日開催の第88回「アカデミック・ハラスメント防止のために」、10月20日開催の第91回「聴覚に障害のある学生への教育支援」、そして11月9日開催の第92回「変革期のメンタルヘルス支援」をいずれも他大学の関連組織との共催により、このシステムを使って実施してきた。

特に第88回は、4会場で100名近くの受講者があり、関西学院大学からお招きした吉野太郎講師による貴重な講演を北陸地区の国立大学の多くの教職員が聞き、質疑応答をすることにより、知識・問題意識の共有を図ることができた。一人の講師の講演を複数大学で聴くだけならば、ビデオでも同じであるが、ライブで他会場の参加者同士で意見を交わすというのは、双方向遠隔授業システムならではの効用といえる。

授業では、私がコーディネーターを勤める教養的科目「研究者になりたい人のための倫理」を毎週火曜日4時限に開講している。本学21世紀COEプログラム「発達・学習・記憶と障害の革新脳科学の創成 文理架橋型研究による挑戦の第一ステージ」の一環をなす授業である。角間キャンパスの主として文系教員の授業を医学部の2年生以上の学生、つまり宝町や鶴間で専門教育を受けている学生たちに、移動することなく、受けてもらえるようにするため、このシステムを活用した。もちろん、文系の学生は角間で受講している。

このシステムのメリットは、医学系教員が角間まで来なくても、鶴間で教養の授業を担当することができる点にもある。すでに、山本博・大学院医学系研究科長にも、お忙しい中、医の倫理委員会についての授業を担当していただいた。全学出動の教養教育の実質化を、診療を担当している医学部教員まで含めて行うためには、今後このシステム活用の幅を広げていく必要があると思われる。

さて、最後にこのシステムの現状での問題点を以下に指摘しておく。

最大の問題点は、技術面でのサポート体制である。私などは、送受信装置についての詳細は全く分からない。トラブルが起きたらお手上げ状態である。現在は総合教育棟では、学生部共通教育室学務係の押上さんが、システム導入の二つの教室についてサポートしており、場合によっては、本学全体の事務的責任者である学生部教務課の田辺さんが、総合教育棟のみならず鶴間キャンパスの教室にまで出向したりしている。他大学では、例えば、福井大学はこのシステム運用のために、専任のTAを置いているということであるが、本学にも絶対にそうした制度が必要である。

次に、講義でも共同学習会でも同じであるが、紙プリントの配布がその場ではできない、したがってミニッツペーパーのような感想シートの配布・回収ができないことを、指摘しておきたい。受信側会場の学生にも、送信側の学生と同じ受講環境を保障するためには仕方がないことである。もちろん、すべての大学でノートパソコン必携ということになれば解決する問題ではある。

なお、黒板の文字は「青色」は受信側会場ではほとんど見えないこと（通常の授業でも青色チョークの使用を避けるべきであることについては、8月4日開催の第84回共同学習会「カラーユニバーサルデザイン」で堀井助教授が報告したとおりである）、送信側でパワーポイント画面をレーザーポインターで示しても受信側受講生には見えないことも、利用者はあらかじめ知っておくべきであろう。

以上、感想を交えての双方向遠隔授業システムについての紹介である。利用価値は十分にあるシステムである。私は、来年度の共通教育担当科目「医事法入門」を、福井大学松岡キャンパス（医学部）に向けて送信する予定である。北陸地区の各国立大学を結んだ科目開発研究にも着手しており、各大学における授業の多様化、学生の学問動機付けの契機としたいと考えている。各教員にも、来年度の授業開講計画作成にあたり、是非とも双方向遠隔授業システムの利用をお願いしたい。

（教育支援システム研究部門 青野 透）